

形式的操作期移行期間にある児童の批判的思考態度と運動有能感の関係

宮本 梨香子 (岡山大学)

1. 目的

本研究の目的は、認知発達段階のうち形式的操作期移行期間における児童の批判的思考態度と運動有能感の関係を明らかにすることである。

2. 方法

批判的思考態度の測定については、武田ほか(2011)が作成した児童・生徒用一般的批判的思考態度尺度(以下、一般的思考態度尺度)と、児童・生徒用学習場面の批判的思考態度尺度(以下、学習場面の批判的思考態度尺度)を用いた。運動有能感の測定については、岡沢ほか(1996)によって作成された運動有能感尺度を用いた。

- 1) 対象者: 小学4~6年生(1,530名)
- 2) 調査時期: 令和2年11月
- 3) 分析方法: 相関分析を行い、全体傾向及び属性(学年、性別、体育における好意、課外スポーツへの参加)による特徴を検討した。

3. 結果と考察

批判的思考態度と運動有能感の関係

一般的批判的思考態度と運動有能感及び学習場面の批判的思考態度と運動有能感に正の相関がみられた。特に、批判的思考態度と受容感との間の相関係数が高くなることが示された(表1)。すなわち、日常生活や学習場面で批判的に考えようとする児童ほど、運動有能感が高くなることが明らかとなった。

表1 批判的思考態度と運動有能感の相関 (**p<0.01)

| | 身体的有能さの認知 | 統制感 | 受容感 | M | SD |
|--------------|-----------|--------|--------|-------|-------|
| 一般的批判的思考態度 | .351** | .397** | .457** | 35.56 | 8.895 |
| 学習場面の批判的思考態度 | .384** | .379** | .438** | 32.96 | 9.081 |
| M | 12.08 | 17.18 | 15.86 | | |
| SD | 4.735 | 3.325 | 3.703 | | |

2) 学年における関係の特徴

学年ごとの一般的批判的思考態度と身体的有能さの認知の関係において、4年生の児童より5・6年生の方が、相関係数が低くなることが示された。また、5年生の一般的及び学習場面の批判的思考態度と統制感の相関係数が他学年より高くなることが示された。一方で6年生は5年生より低くなることが示された理由として、発達により批判的思考態度は高いものの運動有能感が低い児童が現れたことがあげられる。よ

って、5年生は学習場面より生活場面での批判的思考が運動有能感の結びつきが強くなり、努力に対する期待である統制感との結びつきが強くなる転換期であることが明らかとなった。(表2・3・4)

表2 4年生の批判的思考態度と運動有能感の相関

| | 身体的有能さの認知 | 統制感 | 受容感 | M | SD |
|--------------|-----------|--------|--------|-------|-------|
| 一般的批判的思考態度 | .397** | .382** | .440** | 36.44 | 8.665 |
| 学習場面の批判的思考態度 | .388** | .360** | .423** | 34.24 | 9.008 |
| M | 13.07 | 17.68 | 16.08 | | |
| SD | 4.465 | 2.99 | 3.69 | | |

(**p<0.01)

表3 5年生の批判的思考態度と運動有能感の相関

| | 身体的有能さの認知 | 統制感 | 受容感 | M | SD |
|--------------|-----------|--------|--------|-------|-------|
| 一般的批判的思考態度 | .341** | .464** | .431** | 34.67 | 9.139 |
| 学習場面の批判的思考態度 | .380** | .428** | .427** | 32.14 | 9.076 |
| M | 12.18 | 17.14 | 15.69 | | |
| SD | 4.579 | 3.406 | 3.708 | | |

(**p<0.01)

表4 6年生の批判的思考態度と運動有能感の相関

| | 身体的有能さの認知 | 統制感 | 受容感 | M | SD |
|--------------|-----------|--------|--------|-------|-------|
| 一般的批判的思考態度 | .334** | .344** | .447** | 35.55 | 8.815 |
| 学習場面の批判的思考態度 | .375** | .334** | .429** | 32.51 | 9.042 |
| M | 11.06 | 16.76 | 15.82 | | |
| SD | 4.918 | 3.491 | 3.708 | | |

(**p<0.01)

4. 結論

本研究では、全体として批判的思考態度が高いほど運動有能感が高くなる傾向があること、属性の違いにより批判的思考態度と運動有能感の関係に特徴があることが明らかになった。特に学年では5年生を境として、生活場面での批判的思考と運動有能感、批判的な思考と努力に対する肯定的期待の結びつきが強くなる特徴が見られた。以上のことから、学校体育において批判的思考態度と運動有能感の両面を高めるアプローチをすることで、より子どもたちの力を高める可能性がある。また、5年生が認知発達の転換期であることを踏まえ、支援の内容を検討する必要性が示された。

5. 主な参考文献

- 1) 楠見 孝・村瀬公胤・武田明典(2016) 小学校高学年・中学生の批判的思考態度の測定—認知的熟慮性・衝動性、認知された学習コンピテンス、教育プログラムとの関係—。日本教育工学会論文誌,40(1):33-44
- 2) 岡沢祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎(1996) 運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究。スポーツ教育学研究,16(2):145-155